

巻頭言

鳩とドロ亀

渡辺啓吾

宴会の歌の指名に「鳩」を歌おうとして、ハッとした。「鳩ぼっぼ 豆がほしいかそらやるぞ みんなで仲良く食べに來い」。中央が地方へお金をバラまくさまを思いだしてしまった。「池の鯉」にしよう。「出て來い出て來い池の鯉 底の松藻のしげった中で 手のなる音を聞いたら來い」。どうしても住家からひっぱりだすつもりである。だれの作品かと調べてみたら、岩波文庫日本唱歌集に、両方とも明治44年の文部省尋常小学唱歌で、「国民思想統一の一役を与えられたもの」とあった。

この歌で育った人は、長いこと戦争にかりたてられたが、いまは高度成長経済の掛声にあわただしくとびまわっている。その結果、所得はふえたけれども、引き換えに、公害だ、みどりの破壊だ、街は過密で田舎は過疎だと、たいへんなことになった。

都会で育たないドロ亀は、北海道のほぼ中央にある大森林をみてホッとした。よし！ここで一生がんばってみようと決心した。それから28年目にはじめての詩がうたわれた。

できた、できた、やっとでき上った

あの木も、この木もみんな知っている 風雪に耐えぬいて生きてきた

トドマツ稚樹たちも やつと笹からぬけて 陽のあたりをたのしんでいる

みんなのびのびと楽しそうだ ところを得て生きている 能力を出しきっている

誰もなまけていない そこには美がある 山官人生の幸がある

高橋東大北海道演習林長の近刊「林分施業法」にのせられた物語と詩の一部である。

ドロ亀の仕事仲間が百人ほどで、名人芸といわれる2万ヘクタールの森林をつくりあげて、視察者を驚かせ、感激させている。

「この著書は借りものではない。私が親愛なる仲間たちとともに、当演習林の森林から、施業の実践から学びとったものを主体に、個性的にまとめあげたものである。」と序文にあるが、一字一句が生きているすばらしい本だ。

森林は鳩の歌もドロ亀の悩みも、だまってきいているのかと思ったら、雨やどりしたエゾマツの大木が「小さい林分ごとに施業しなさい」「動物たちのことも考えて……」と教えてくれたという。

この季報も12号を数えるにいたったが、試験場発足以来まだ8年で、大先達の長年の業績に深く学び、貴重な年輪を重ねたいものと思う。

(研究第一部長)